

- ・毎年検査をしても大丈夫だったが、4年前に癌が見つかった。医療のおかげで回復できたが、いつ再発するか、不安でならない。
- ・核兵器をなくすことは難しいが、人の心の問題として努力したい。生きている限り、核兵器の恐ろしさ・愚かさを伝えたい。
- ・戦争をしない大人になってほしい。
- ・「水をください…」水も飲めずに亡くなった人々の無念な気持ちを忘れてはならない。
- ・平和であることを当たり前になってしまうことが、最大の敵である。
- ・平和は、あるものではない。努力してかちとるもの。「平和のとりでを心の中に築かなければならない」とユネスコの共同宣言にあることを大切にしてほしい。
- ・原爆投下直後は、悲しみ・怒り・憎しみだけだった。今もアメリカに対して消えることはない。しかし、憎しみから平和は生まれえない。消し去ることはできないが乗り越えることはできる。アメリカと手を取り合って核兵器をなくしていきたい。



原爆の爆心地近くの「広島市産業奨励館」の建物は、原爆ドームと呼ばれるようになり、決して忘れてはならない歴史、核兵器の恐ろしさを伝えているのです。



「安らかに眠って下さい  
過ちは繰返ませぬから」

この言葉が刻まれている石碑の中に原子爆弾の犠牲者、影響を受けて亡くなった方の名簿が納められています。多くの人の無念な気持ちもびっしりと詰まっているのではないのでしょうか。

全世界の財産として、私たちは学び続けなければなりません。

24年度の町広島平和体験研修に参加した4名の生徒が、なぎがま祭で研修報告を兼ね発表をした一部を掲載させていただきました。紙面の都合上ご紹介できませんでしたが、この他にも、長野市にある「松代大本営跡地の見学」の発表がありました。

先日、旅行に行った帰り道、休憩に立ち寄った湖で魚釣りを楽しんでいる親子の姿が目にとまりました。私も小学生の頃よく父に釣りへ連れて行ってもらった記憶が蘇り、懐かしい思い出に浸りながら帰ってきました。

思い出してみると、サッカーの試合等で毎週のように飛び回っていた私にとって、たまに空いた休日に父と川へ釣りに行くことは一番の楽しみでした。よく前の晩は一緒に仕掛けを作りながら、「明日の夕飯はヤマメの塩焼きだ」と、楽しみにできなかったことを覚えていてます。

実際そう意気込んで川へ行っても、だいたい釣れるのは一、二匹程度。うさ晴らしに、近くの釣り堀センターでニジマス釣って帰ってくるというのがお決まりのパターンでした。それでも夜、家の庭で炭火で焼いて食べる魚の味はまた格別で、充実した休日を感じる至福の時でした。

振り返ると、小さい頃父に、山に川に様々な場所に連れて行ってもらう、自然と触れ合い遊んできたことが、その後自分の中で生き続け、大人になった今も私の生き甲斐となっています。

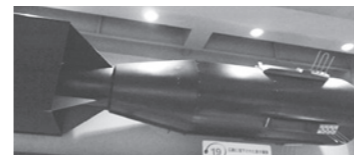
あれから十数年、久々に父を誘って、昔のように一緒に釣りに行ってみようかな、と思う今日この頃です。

(伊藤)

INTERVIEW



たった一発の新型爆弾が、普通の人々の暮らしや幸せを消し去ることになった



投下されたリトルボーイの模型



原爆投下の時刻のまま止まった時計



三輪車に乗っていた男の子の命も奪いました



爆心地から310mの基町の惨状



1945年8月6日 原爆投下

広島平和記念資料館を見学して、原爆の恐ろしさを目の当たりにしました。



夏服を身につけた少女は大火傷を負い、亡くなりました



仏像などあらゆるものを溶かしました

平和の最大の敵は、平和

24年度広島平和教育体験研修報告

下諏訪中学校三年  
(現在 卒業)

川村 鴻太  
松澤 美萌  
山澤 進藤

美 翔  
咲 麻



中西さんの被爆体験講話をお聞きしました

- ・15歳、爆心地より2.7kmで被爆した。
- ・8時15分、目もくらむような明るさで意識を失った。
- ・気づいた時、自分は無傷だった。
- ・「苦しい…」「やられた…」「熱い…」いろいろな声が聞こえてきた。
- ・火傷で皮膚がただれて歩きまわる様子や死んだ赤ん坊を抱えている母親。
- ・建物に閉じ込められてしまったところに火災がせまっていた、どうしようもなかった。
- ・水を求めて井戸で力尽きている人もいた。
- ・幸運に生き残ったのに、「生き残ったことがけしからん」など、白い目で見られ差別にあった。
- ・6000人ほどの原爆孤児（原爆で親を亡くした子ども）が出た。冬が近づき、飢えと寒さで亡くなった者もいた。
- ・原爆を受けた奴と結婚すると子にうつる。一緒に仕事をするとうつるなどと差別を受けた。



お話しする中西さん